

戦後70年 日系アメリカ人の肖像

戦後70年。あの時代のことを記憶する世代はとても少なくなっています。

日系人・日本人の差別と強制収容の歴史も例外ではありません…。

薄れゆく歴史の記憶を探して、日系二世、三世の皆さんを訪ねました。

1 945年に第二次世界大戦が終わってから今年で70年が経ちます。今、私たち日本人はここアメリカで、ほかの国からの移民や米国人と同じように、好きな場所に出かけ、住み、学び、働き、そして米国民権をも取得することが出来ます。でも、実はついこの間までそれが許されていなかったことを想像できるでしょうか。

アジアからの移民は24年に禁じられ、再び門戸が開かれたのはなんと65年のこと。また52年まで日本人は市民権を取得することもできず、その上、太平洋戦争中はそうした日本からの移民もその子どもたちも、西海岸に暮らす日本人・日系人はみな、自らの意思とは関係なく収容所へと送られました。そして、その事実すら80年代になるまで公に語られることはほとんどなかったのです。

「自由の国アメリカ」のイメージと正反対にある、日系移民の差別の歴史。それは、アメリカの歴史の一部であり、同じくアメリカで暮らす日本人である私たち自身の現在へと脈々とつながる歴史です。しかし人種間や宗教間の緊張が加速し、ヘイトクライムやレイシャルプロファイリングの議論が熱を帯びる近年、もし私たちがこの歴史の教訓を忘れてしまつたら、これらは過去の歴史に留まらず、現在や未来になってしまつかもしれないと思うのです。

日本が真珠湾を攻撃し、日米が太平洋戦争を始めた1941年から数えて74年、そして終戦から70年、その間、アメリカに暮らす日系人は、どんな思いでどんな日々を送ってきたのでしょうか。

戦前の日系コミュニティのこと、戦争中の強制収容、アメリカ軍の戦功に多大な貢献をした日系人部隊のこと、そして戦後の日系社会の復興のことなど、終戦から70年が経つただから聞いておきたい人生と歴史のお話を、日系二世三世の皆さんにうかがいました。

1943

忠誠登録

米国政府は収容所内の日本人・日系人に対し、「忠誠登録」と呼ばれる質問状を送付。この中の「27番：米軍に志願する意思があるか」、「28番：米国に忠誠を誓い、天皇への忠誠を破棄するか」の問いが物議をかもす。これらにイエスと答えた者は、米国に忠誠だとみなされ、仕事を得ると収容所からの出所が可能になった。

1941

太平洋戦争

12月7日、日本軍による真珠湾攻撃により開戦。日本のスパイではないかと疑われた日本語教師や新聞発行人、牧師などの日本人の指導者らが逮捕、拘留された。なお開戦に先立ち、11月にはサンフランシスコにMIS(米陸軍情報部)の日本語学校が極秘に開校された。MISは主に日系兵で構成された語学要員部隊で、捕虜の尋問や、戦後の日本の占領、復興援助などに携わった。

1924

1924年移民法

米国への移民希望者に対し、国別に人数を制限する移民法が施行。事実上、日本からの移民が全面的に禁止されたことから「排日移民法」とも呼ばれる。

1908

日米間で紳士協定締結

米国在住者による家族呼び寄せを除き、日本人労働者の渡米が禁止される。写真で見合いをして結婚し渡米する「写真花嫁」として、24年までに数千人に上る女性が進出。

1880年代

日本から移民が増加

1884年、明治政府が日本国民の海外渡航を正式許可。若い男性を中心に多くの日本人が渡米し、さとうきび農園や缶詰工場、鉄道建設、農場などで労働に従事した。

1940

1930

1920

1910

1900

1880

1943

第442連隊戦闘団編成

志願兵による日系二世部隊、第442連隊戦闘団が編成される。日系人部隊は、壮絶な犠牲を払いながら欧州戦線を中心に多大な戦功を残し、アメリカに対する忠誠を身をもって証明した。太平洋戦争中には、100歩兵大隊、442連隊、MISの3部隊に、約3万3000人の日系人が従軍した。

1942

日本人・日系人の強制収容

2月19日、大統領令9066号により、西海岸に住む日系人・日本人に立ち退き命令が出される。約12万人が内陸部の10カ所の収容所に送られた。人口の4割近くが日系人であったハワイでは、危険人物とみなされた者のみが収容された。また同年には例外を除き、日系人は軍への新規入隊を拒否された。

1931

満州事変

日本は15年戦争に突入。33年には国際連盟を脱退。37年、日中戦争開戦。

1913

外国人土地法

13州で外国人土地法が成立し、市民権を持たない外国人の土地所有が禁止される。

1900年代

排日運動

人種差別感情や、経済的な成功が目立ち始めた日本人に対する反感から、西海岸を中心に反日感情が高まり、各地で排日運動や差別的な政策が実施された。

日系移民の歴史 1880 - 2015

日本では触れる機会の少ない日系移民の歴史。強制収容をはじめとする差別にさらされながらも、日系人は米国市民としてアメリカ社会で多大な活躍をしてきました。

1982

不当解雇への補償

カリフォルニア州で戦中の日系人の不当解雇に対する補償法案成立。86年には、ワシントン州で、戦中に行われた州政府、シアトル市の日系人職員の不当解雇に対する賠償実施。

1988

「市民の自由法」成立

8月10日、「市民の自由法案」にレーガン大統領が署名し、成立。米国政府は、太平洋戦争中に強制立ち退き・収容された日本人移民・日系人に対して公式に謝罪。90年から、法成立時に存命の元収容者に対し各2万ドルの補償金が支払われることになった。

2011

日系人部隊に勲章

第100歩兵大隊、第442連隊戦闘団、MISに米国最高位の勲章である議会名誉黄金勲章が授与。

2010

1990

1980

1970

1960

1950

2015

収容伝承のため300万ドルの助成

収容の歴史伝承のため、国立公園局は全米の強制収容所管理団体や大学等へ助成金300万ドル弱の支給を決定。また、ハワイのホノウリウリ日系人収容所跡地が国定史跡に指定。ホノウリウリ収容所は1943年に開設されたもので、約4000人の日系人が収容された。

1992

全米日系人博物館開館

日系人の歴史の保存と伝承を目的に、ロサンゼルスに設立された。

1980

CWRIC創設

「戦時市民転住収容に関する委員会(CWRIC)」が創設。81年に全米各地で公聴会が開催され、約750名が証言した。

1996

NPO団体「Densho」設立

日系人の歴史の保存を目的とした非営利団体で、ウェブサイト (www.densho.org) では収容の体験談など日系人のインタビューが閲覧できる他、教材のダウンロードも可能。日本語サイト (<http://nikkeijin.densho.org>) もある。

1950～
60年代

公民権運動活性化

1950年代から60年代にかけて、公民権運動が活性化。64年には人種や宗教、性、出身国による差別を禁じる「公民権法」が成立した。公民権運動は若い三世四世にも影響を与え、強制収容に対する補償運動(リドレス運動)を促進させた。

1972

MISが公に

米陸軍情報部の機密文書が機密扱いでなくなり、MISの存在が公になった。

1965

移民法改正

出身国による移民数の割り当て制限を撤廃。これにより日本を含むアジアからの移民に門戸が開かれた。

1960年代
初頭

日系人の地位向上

戦後も根強く残っていた反日感情が薄れ、日系人は高い教育水準、就業率や高収入、低犯罪率から「モデル・マイノリティ」と呼ばれるように。

1944

米国籍放棄

米国籍放棄を可能にする国籍離脱法が成立。強制収容に対する怒りや抗議から日系人5589人が放棄し、うち1327人は日本に送還された。

1944

ミツエ・エンドウ勝訴

収容所からの釈放を要求したミツエ・エンドウの審議が、連邦最高裁で勝訴を収め、最高裁は翌年1月2日より、収容所内の日系アメリカ人全員を釈放するよう命じた。

1945

終戦

8月15日、日本によるポツダム宣言受託により、太平洋戦争が終結。収容所は閉鎖され、日系人は元の土地で、または新たな土地で、生活の立て直しを図った。

1948

部分的な賠償法成立

トルーマン大統領が「日系アメリカ人立ち退き賠償法」に署名し、3800万ドルの賠償が行われた。しかし実際の損害額には遥かに及ばないものだった。

1952

移民国籍法改定

移民国籍法が改定され、一世の帰化が認められる。日本人にも移民枠が認められたが、国別の移民数割り当て規定は存続し、移民は制限されたままであった。

1956

外国人土地法が無効に

カリフォルニア州で外国人も土地を購入できるように。66年にはワシントン州でも外国人土地法が無効化。

1959

ハワイが50番目の州に

ハワイが米国の50番目の州になり、ハワイ出身のダニエル・イノウエが日系人初の連邦下院議員に選出。

子ども時代を過ごした沖縄で 米軍として日本人の命を救った帰米二世

比嘉武二郎さん

予想外の真珠湾攻撃 開戦後、日系人部隊に志願

今年92歳になる比嘉武二郎さんは、オアフ島生まれの帰米二世。2歳の時に母に連れられて、兄姉と共に両親の故郷の沖縄に移りました。当初の予定では3年後に家族でハワイに戻る予定でしたが、母が肋膜炎になり旅ができた状態がなく、父が兄と姉を連れて帰国。比嘉さんは、母と共に沖縄に残りました。しかし12歳の時に母が死に、祖父母に引き取られたものの翌年には祖父母も他界し、叔父の家族と生活しながら尋常高等小学校を卒業しました。ところが当時の日本は日中戦争の真っただ中。日本軍に徴兵されるのを恐れた父が、1939年、比嘉さんが16歳の時にハワイに連れ戻しました。

41年12月7日午前9時頃、比嘉さんが働いていたホノルルのYMCAのカフェテリアに、取り乱した白人女性が「戦争！戦争！コーヒー」と言いながら駆け込んできました。「私がコーヒーを差し出すと、彼女はガタガタと震えていたので、コーヒーを半分ほどこぼしてしまいました。『戦争よ！夫を真珠湾に送り届けて来た」と

ころよ』と言うので、初めは少し頭のおかしい人かなと思ったのです。屋上に行き、真珠湾の方を見ると、飛行機が墜落するたびに黒い煙が上がるのが見えました。でも、まだ戦争が勃発したとは思わず、本格的な演習だと思っていたまま、見てみると、真珠湾ヒッカム基地の高射砲からの砲弾が4、5発、ヌアヌア通りのサイミン屋の前や、日本語学校のあたりに落ちて、トタン屋根が飛んで大きな爆音を立てました。敵の飛行機に向けて撃った不発弾でした。11時頃に、戦争が始まったことを伝えるラジオ放送があり、事態の深刻さに驚いて慌てて屋上から地下に逃げ込みました」と比嘉さん。

戦争が勃発したその日から、日系人は適性外国人とみなされ、西海岸のように全員ではなかったものの、特に日本への忠誠心が強いとみなされたハワイの日系社会のリーダーたちが次々に収容所に送られました。私は収容所行きを避けるために、高校在学中に兄と共に軍に志願しました。兄は合格しましたが、私は受理されず、日本で教育を受けたせいだろうかと思いましたが。しかし数ヶ月後に陸軍省から『二世の戦闘部隊を作るが、お前はまた志願する気

持ちがあるか』という内容の手紙を受け取りました。

志願したら太平洋戦争に送られることは分っています。戦場で従兄弟や親戚、同級生と鉢合わせたらイヤだなと思いましたが、一度志願した以上、今さらできないとは言えません。志願して受理されました。アメリカへの忠誠心に対する疑いが晴れてうれしい反面、とても不安な気持ちでした」と当時のことを振り返ります。

終戦前の沖縄に上陸 恩師・旧友との奇遇な再会

米国土土でMIS(米国陸軍情報部)の日本語学校に通った後、第96歩兵師団に配属。フィリピン上陸を経て、沖縄に上陸した比嘉さんの任務は、壕にこもった人たちの投降の呼びかけでした。「人影が見える壕を通りかかり『出て来てください』と何度も叫んでも誰も出て来なかったのです。引き金を引こうとしたのです。そうしたらお婆さんと女の子が出て来て、『もう少しで人殺しをするところだった』と胸をなでおろしたこともあります」。

ある時、沖縄の難民収容所(民間人収容所)に兵士が潜んでいるというので、比嘉さんが尋問の通



Photo © Text by Yurie Sakakihara

Takejiro Higa

1923年、ハワイ・オアフ島ワイパフ生まれ。2歳から16歳まで沖縄で育った後、ホノルルに戻る。高校在学中に軍隊に志願するが却下され、陸軍省からの手紙により再志願。サンフランシスコとミネソタのMISの日本語学校を経て、1944年フィリピン戦、沖縄戦に参戦。戦後は韓国に赴き、1945年12月ハワイに戻り除隊。ファリントン高校、ハワイ大学卒業後、国税庁に入局し90年に引退。



ミネソタ州キャンプ・サベージにあったMISの日本語学校で軍隊訓練を受けた。左は1943年、右は43～44年頃
Photo Courtesy of Takejiro Higa

ターミナルアイランドからロングビーチへ 変わりゆく日系コミュニティと共に

巽 幸雄 さん(写真右) & 長男の 一郎 さん

頼るものは互いしかない…
日系コミュニティの絆

幸雄さんの生まれ育った、ロサンゼルス港にある人工島ターミナルアイランドは、戦前には約3500人の日本人・日系人が住んでいた漁村。和歌山県出身の幸雄さんの父はそこで缶詰工場を経営していました。当時のターミナルアイランドは「家にカギをかけたたりすることなく、皆が家族のようなコミュニティでした。悪いことをしようものなら、家に帰る前に親にもそれがもう知れているようなね(笑)」と幸雄さん。周りの子どもたち皆で現地校に通い、それが終わると毎日、日本語学校に通っていたといいます。

日本で商業学校を卒業後、米国でも高校を卒業し簿記係として勤めた後、友人に誘われて商業漁業の道へ。危険と隣り合わせではあるものの、簿記係の10倍近い稼ぎを得られることもあったそうです。その頃は野球にも熱中し、San Pedro Skippersという強豪チームのスター選手でした。「毎週日曜の試合には二世も三世も皆やって来て試合を見ていました。カリフォルニアには10チームくらい日本人チームがありましたね」。

そのターミナルアイランドの日本人コミュニティが変化を余儀なくされたのは1942年。2月9日に同地の二世の男性が一人残らずFBIに連行されたのです。残った二世、二世も2月19日の大統領令9066号の発令後48時間以内の立ち退きを命ぜられ、幸雄さん家族はマンザナー収容所へ。そこにはターミナルアイランドから約1千人が収容されました。助けてくれる国もない場所でした。頼りにできたのは、ターミナルアイランドの仲間ばかり…。そこでコミュニティの紐帯はいつそう強く結ばれたと言います。

しかし「米国民であるにもかかわらず、敵性国民として収容されたことは、長い間、父をはじめ二世の心に『恥』として刻まれているのだと思います」と幸雄さんの長男、一郎さんは語ります。「私が子どもの頃に、父が家族を連れてマンザナー近くに住んでいた白人の女性を訪ねたことがありました。その時父は『マンザナーの郵便局で働いていた時の上司で、古い友人』だと紹介してくれたのですが、なぜ収容所にいたのかなど、政治的な背景を話すことはありませんでした。父や母をはじめ二世が収容所について語

り始めたのは、88年に『市民の自由法』が成立し、米国政府が正式に謝罪をしてからです。二世はそれでようやく汚名を雪いだ顔を上げて話せるようになったのだと思います(一郎さん)。

世代を経て変わりゆく中で
かつての時代を伝える碑

戦争の後、幸雄さんはロサンゼルスに帰郷。しかし、ターミナルアイランドは戦中に跡形もなく破壊され更地になっていました。幸雄さんは友人の商業漁船の乗組員として働き、53年にロサンゼルス港近くのロングビーチに家を購入しました。ターミナルアイランドの住民の多くは、戦後ロングビーチに戻ってきました。故郷はなくなってしまうけれど、一番近い所と言ったところから」と幸雄さん。また、56年にはロングビーチの一角にあった日本食等の食料品店「オリエンタルフードマーケット」を購入し、26年間にわたって同店を経営。そのプロックは、薬局、レストラン、保険、理髪店…とさまざまな日系のビジネスが軒を連ねていたそうです。

「当時のロングビーチのコミュニティは、かつてのターミナルアイランドのように、皆が家族み



Yukio Tatsumi

1920年、イースト・サンペドロ(現在のターミナルアイランド)生まれの日系二世。33年から日本に。和歌山県下里の商業高校を卒業後にアメリカに戻り、サンペドロ高校を卒業。戦争中はマンザナー収容所に収容される。終戦後、ロサンゼルスに戻り、漁業等を経て、日本食などのスーパーマーケットを経営。ターミナルアイランドの元住人たちで構成される「ターミナルアイランダーズ」元会長。2014年、日本政府より旭日双光章受章。



1941年、カリフォルニア州のチャンピオンになった、ターミナルアイランドの野球チームSan Pedro Skippers。幸雄さんは前列右から3人目

ハワイの収容所から本土各地の収容所へ 戦争に翻弄された帰米二世

金城秀夫さん

日本での教育を理由に 収容所に隔離

ハワイ島生まれの日系二世、金城秀夫さんは、1922年、1歳の時に兄と共に母に連れられて、父の故郷の沖縄に渡り、旧糸満町で育ちました。日中戦争勃発後の38年、金城さんは沖縄に残ると言った母を残して、ハワイに帰郷。帰国後はホノルルでコックとして働いていました。

41年12月7日、真珠湾方面に真つ黒な煙が立ち上るのを見たそうです。「一緒に見ていた父が、『日本のような小さな国が、アメリカのような大国と戦って、どうやって勝てるのか!』と言ったことを今でも忘れません。私は米国市民ですが、日本で育ち、日本の教育を受けましたから、国は小さくても、日本人は名誉のために命を惜しまない。負けるわけがない」と思っていましたと金城さん。

日本で軍国主義教育を受け、高等小学校では木製の銃を使った軍事教練も受けた金城さんは、開戦後、いつFBIから召喚状が来るかと、びくびくしていたそうです。恐れていた召喚状を42年春に受け取り、事務所に行くと「日本で軍国主義教育を受けたか」と

聞かれ、素直に「はい」と返答。その日は帰宅できたものの、1週間後に再度召喚され、ホノルルのサンドアイランド抑留所に送られました。「フェンスに囲まれた一階建ての小屋に放り込まれました。フェンスは3重になっていて、真ん中のフェンスには電流が流れていました。それを挟んで日本人捕虜の収容所があり、時々歌を歌っているのが聞こえました」。

忠誠登録に「ノー」と回答 収容所をたらい回しに

半年後、金城さんは船でサンフランシスコに移送され、そこから蒸気機関車で、主に西海岸の日系人が収容されていたユタ州のトパズ収容所に移されました。そこで「忠誠登録」のアンケートに答えることに。「たくさんの質問がありましたが、今でも忘れないのは、27番目の『米軍に志願するか』と28番目の『天皇に弓が引けるか』の質問です。英語がよく分からなかった上、深く考えなかったの、どちらの質問にも「ノー」と答えました。ところが、両方の質問に「ノー」と答えることは、アメリカに對する忠誠心がない者と見なされることだったのです。その結果、金城さんは、カリフォルニア州北部のツールレイク収容所へと送られました。同収容所は、当初は一般的な日系人の収容施設でしたが、43年9月以降は、忠誠登録で不忠誠だとみなされた人の隔離センターになっていました。多い時には約1万9千人が収容され、角ごとに見張り小屋があり、米兵が監視の目を光らせていました。

「私は50番地をあてられたのですが、途中からホノリウリ収容所に収容されていた8人が同じ区画に加わりました。ある時、その50番地で暴動が起きたのです。問題を起こしたのはごく一部の人間でしたが、50番地の住人全員が連帯責任を負わされ、罰として雪の降る中、2時間以上も外に立たされました。私を含めた何人かがさらに監視の厳しい隔離施設に入れられたので、リーダー格の人がハンガーストライキをやろうと提案し、18食、1週間ほど断食をしました。2カ月ほどして隔離施設から出てよいと言われ、50番地に戻りました」。

金城さんはそうした理不尽な扱いに抗議の意味を込めて、米国民権を放棄してしまい、そのまま収容所で終戦を迎えました。「市民権を保持していたら終戦後すぐに収容所から出られたのですが、放棄していたので出してもえなかったのです。そうこうするうちにツールレイク収容所が閉鎖されることになり、今度はテキサス州のクリスタルシティー収容所に送られました。ここでは入所者の半分がドイツ人で、日系二世や南米の日系人が収容されていました」。



上／ツールレイク収容所時に作った入所者の寄せ書き集
左／カリフォルニア州ツールレイク収容所にて、1946年頃。右端が金城さん

Photo Courtesy of Hideo Kaneshiro

Hideo Kaneshiro

1921年、ハワイ島生まれ。1歳から16歳までを沖縄で過ごし、38年ハワイに戻る。太平洋戦争勃発後の42年、FBIに連行されオアフ島サンドアイランド抑留所に収容。カリフォルニア州ツールレイク収容所を経て、クリスタルシティーのテキサス家族収容所に。ニュージャージー州シーブルックスでの就労を経て、47年にハワイに戻る。パンナム航空に27年間勤務後、80年に引退。



Photo & Text by Yurie Sakakihara

LA

太平洋戦争、強制収容… 日米の過ちの中を生き抜いた帰米二世

トオル・インベさん

移住、大不況そして戦争 日系人家族を翻弄した歴史

1926年にサンフランシスコで生まれたトオル・インベさんは、2歳から12歳まで静岡で育った帰米二世。「父は静岡歩兵第34連隊を除隊後、サンレアンドロで花農家をしていた伯母夫妻に呼ばれて、19年に渡米。伯母夫妻はもとも出稼ぎのつもりでしたので事業が成功した後、28年に帰国しました。その時2歳だった僕は、子どもがなかった伯母夫妻と共に日本に行ったのです」。

アメリカに残ったトオルさんの家族は29年の大恐慌によって全財産を失い、翌30年頃にロサンゼルスに転居した時は食べる物にも事欠くほど。「30年に兄が日本に来たのも、それが一つの理由だったのではないかと思います」。

30年代の日本はいよいよ太平洋戦争に向かいつつある頃。当時の日本政府は軍人が牛耳っていたおかしなプロパガンダをしていましたが、口に出してはそう言いませんでした。皆、僕がアメリカ人だと知っていましたしね」。

39年、小学校卒業を目前にして、迎えに来た母と共にアメリカに帰国。家族は当時、ダウンタウン

ンLAで労働者向けのホテルを経営していました。トオルさんは帰国後、最初の1年は移民向けのクラスで英語を学び、翌年には9年生に編入。美術に秀で、美術学校の奨学生にも推薦されていました。ですが、41年に全部ひっくり返ってしまったのです」。

元日本軍人であった父は、真珠湾攻撃の起きた12月7日に逮捕。残された家族は、翌42年5月の半ばにサンタアナ集合センターに送られ、そしてワイオミング州のハートマウンテン収容所に送られました。「日系人だから」という理由でキャンプに入れるのは違憲だと僕は分かっていた。しかし、人種差別以外の何ものでもないと思わなければ、できることは何もなかった。大統領の命令だったのですから」。

携帯を許された靴には衣類を詰め込み、2台の車は売ることもできずに後に残りました。「持っていないのは皆知っていましたよ。でも僕も買わなかったんです。でも僕の家族が幸運だったのは、米系の銀行に口座を持っていたこと。日系の銀行は戦争が始まってすぐから1年ほど凍結されてしまつて、多くの家族はお金を引き出すこともできなかったのです」。

11月には父もハートマウンテンに合流。しかし食堂で3食が配給されたキャンプでは家族で食卓を囲むことはほとんどなくなりました。「僕の家族を含め、おそらく多くの家族の関係が変わったのではないかと思います」。

43年に実施された「忠誠登録」では、トオルさんを含め弟妹は27番、28番の質問に「イエス」と回答。「決めかねていた両親に『帰りたいなら自分だけで帰って。僕らは残る』と言ひ、アメリカで身を立てるつもりだった両親も最終的には『イエス』と答えました」。

終戦後はLAに帰郷 MISとして朝鮮戦争に

忠誠登録を経てキャンプの外での労働が認められたトオルさんは西部の農場で働き、45年の終戦をアイダホで迎えました。戦後はサクラメントで働き、LAに帰郷。「家族も皆LAに戻ってきました。僕は西海岸出身ですからね、西部にはいられなかった(笑)」。

50年には家族で園芸店を始めましたが、トオルさんは52年に徴兵。適性検査を受けた際、日本語ができたので、MIS候補になりました。基礎訓練後、日本の米軍基地内のMISの学校に8週間

通ひ、そこで軍隊用語を習いました。朝鮮戦争のさなかの韓国に送られ、北朝鮮の捕虜を日本語で尋問し、英語でレポートを作る業務に約1年間従事。「前線に送られていたら戦死していたかもしれない。この時は日本で教育を受けて良かったと思います」。

54年に帰国後は、奨学金を得て大学に通うと共に家業を手伝い、58年からは30年にわたって郵便局に勤めました。リタイアした88年は「市民の自由法」が成立した年。想像もしていなかったもので、うれしいというより驚きました。「失ったものはもうないもの。悔やんでも仕方ない」と思っています。話をするのもなかったというトオルさん。訊かれなかったから、言わなかったのです。ほとんど誰も知らなかったわけだから、訊かれないのも当然ですね」。

今、トオルさんは流暢な日本語を生かし、全米日系人博物館のボランティアガイドとして、来館者に日系人の歴史を伝えています。

Tohru Isobe

1926年、サンフランシスコ生まれ。2歳から12歳まで日本で育つ。39年に帰国し、ロサンゼルスで学校に通う。42年、家族でワイオミング州のハートマウンテン強制収容所に。44年、キャンプ外での労働に就き、戦後はロサンゼルスに戻る。52年に徴兵され、朝鮮戦争でMISとして北朝鮮人捕虜を日本語で尋問する業務に携わる。帰国後は、88年まで郵便局に30年間勤務。現在、全米日系人博物館でボランティアガイドを務めている。

南北軍事境界線近くのムンサンにて
(1953年10月)



韓国での従軍中の休暇で京都を訪問
(1953年)



日系スーパーを通して見る シアトル・タコマの日系人の暮らし

トミオ・モリグチさん

子どもの目から見た 戦前の日本町と収容所

ワシントン州・オレゴン州最大の家族経営の日系スーパーマーケット「宇和島屋」は、トミオさんの父・富士松さんが1928年にタコマで創業した食料品店から始まりました。富士松さんは20年代に愛媛県から渡米。実家は貧しく、森口家の長男として、お金を稼いだら日本へ帰るつもりでした。母の貞子さんは07年にシアトルで生まれ、日本で教育を受けて、結婚を機に帰国した帰米です。

多くの日本人・日系人が暮らしていたタコマで商売に精を出していた森口さん一家ですが、42年に日本人・日系人に対し、西海岸からの強制立ち退き令が出され、生活環境は一変。「シアトルの日系人はミニドカ収容所へ、タコマの私たちはカリフォルニアのパインデール集合所を経て、ツールレイク収容所へ送られたのです。集合所で妹のヒサコが生まれました」。

トミオさんは、収容所では、日本に帰った時に備え午前中は日本語の学校へ、午後は英語の学校へ通いました。学校の後は収容所内の川で泳いだり、野球をしたり、食事は食堂ですることになっていて、簡素でしたが悪くはなかったです。父はそこでコックとして働いていました。家族に与えられた部屋も簡素で、狭いものでしたが、器用だった父が机や椅子を作ってくれました。収容所では、妹のトモコ、弟のトシが生まれました。

翌43年、「忠誠登録」が実施。ツールレイク収容所は、アンケーターの27番、28番に「ノーノー」と答え、米国に忠誠心がないと見なされた日系人らが収容される隔離センターの役目を担うことになりました。ただし、森口さん一家のように、他の収容所へ移転せず、そのまま留まることにした人たちも6千人以上いたそうです。

終戦から今日までの シアトルの移り変わり

そして迎えた終戦。富士松さんは家族より一足先に収容所を出ると、シアトルで生活再建のメドを立て、2カ月後に妻と子呼び寄せました。「シアトルに来て約1年後、父はかつての日本町にあったフィリピン人が経営していた小さな食料品店を買いました。当時は不景気で、その店の経営状態はあまり良くなく、経営者は喜んで売ってくれたようです」。



戦後、シアトルに再オープンした宇和島屋。左写真の店頭に立っているのは富士松さん。宇和島屋シアトル店は、70年にインターナショナル・ディストリクト内で移転し、2000年には6万6000sqftの現在の店舗へと再移転した。



Tomio Moriguchi

日系スーパーマーケット「宇和島屋」取締役会長。1936年、ワシントン州タコマ市生まれの日系二世。6歳の時、ツールレイク収容所に収容される。61年、ワシントン大学卒業。62年より宇和島屋で働き始める。長年、シアトル日系人社会のために尽力し、北米報知発行人、日系コンセンサス役員会メンバー、全米日系人博物館サポーターなどを務める。2005年、日本政府から旭日小綬章を受章。



SEATTLE

戦後、第442連隊の一員として従軍した後、 退役軍人会会長として日系社会に貢献

トシ・オカモト さん

忠誠登録により 家族は別々の収容所へ

シアトルを代表する観光名所、バイク・プレイス・マーケットは、1907年に設立された、アメリカで現存する最古の公設市場と言われています。設立当時、シアトル近郊では多くの日系二世、三世が農業に従事していて、42年に立ち退きを強制されるまで、多くがここで農作物を販売していました。トシさんもそのうちの一人。「私が幼い頃、父は大きな貿易会社に勤めていました。しかし、29年の世界大恐慌で会社は倒産。家族で郊外へ引っ越し、父は農場で働くようになりました。とても貧しい生活でした。15歳になる頃には車の運転ができない父に代わってトラックを運転し、バイク・プレイス・マーケットへ野菜を運んだものです。学校へ行く前と放課後は父と同じように農場で責任を持って働きました。真珠湾攻撃の日も父と農場にいて、姉が慌てて伝えにきたのを覚えています」。

誠登録」が行われました。トシさんと姉は27番、28番にも迷わずイエスと回答。当時、同収容所には両親、そして父と先妻との間の4人の子が暮らしていて、帰米である彼らはトシさんらを説得しようとして、一家は大いに揉めました。「結局、母は私と姉に意見を合わせると言い、また心臓疾患があり自立した生活のできなかった父も母に付いていくと言ひ、義兄たちは私を説得するのを諦めました。イエスと答えた人が別の収容所へ移動となることを知ったのはその後です」とトシさん。

戦後のイタリアで従軍差別を越え、日系社会に貢献
トシさんは、基礎訓練を受けた後、白人の兵士に混じって戦車や大型トラック、水陸両用車などの整備修理のトレーニングを受講。ところが、ほかのメカニックが太平洋へ送られるのを尻目に、トシさんには待機の命。遅れること1カ月。ほかの二世と共に、日系人部隊の第442連隊戦闘団に補充要員として合流すべく、終戦後のイタリアへ向かいました。「442連隊が苛烈な戦闘を経たことは知っていましたが、戦功についての報道は少なく、その時は活躍の一部しか知りませんでした。当時の442の任務はドイツ人捕虜の警護。激戦を経験していないのに、442の退役軍人を名乗るのに、戦後気恥ずかしい思いがしたこともあります」。

トシさんは、その後、第88歩兵師団でメカニックとして勤務し、47年に除隊。シアトルへ戻ると、Gービル(退役軍人向けの教育資金等の給付)を使い学校でさらに自動車整備について学びます。自動車の需要が急増していた時代で、整備工は引く手あまた。卒業と同時に白人の同級生が簡単に就職先を決めていくなか、日系二世であるトシさんは差別を受け、なかなか仕事を見つけないことができません。トシさんはしばらくシアトルの港で海軍の仕事をした後、シアトル市の採用試験を受験。自動車整備士としてシアトルの消防署で働くことになりました。当時、シアトルの消防署で働く初マイノリティーだったトシさんは、その後リタイアまで32年間にわたってそこで働きました。

Tosh Okamoto

1926年、シアトル生まれの日系二世。両親は熊本県出身。ツールレイク収容所、ハートマウンテン収容所を経て、18歳の時に徴兵。軍用車の整備などのトレーニングを受け、第442連隊戦闘団の補充要員として終戦後のイタリアへ。47年除隊。終戦後は、消防署に勤務する傍ら、高齢化した一世が日本語で介護を受けるための施設「日系コンサーンズ」設立に共同設立者の一人として関わり、2期にわたり同団体の代表を務めた。



トシさんが最初に収容された、カリフォルニア州ツールレイク収容所のバラック (1943年頃撮影)
Photo Courtesy of James Nakano, Denobo



戦中は米国のため、 戦後は一世のために戦った二世

ヒロ・ニシムラ

徴兵が強制収容か MISとして戦場へ

ヒロ・ニシムラさんが生まれたのはシアトルの日本町（現インターナショナルディストリクト北側）。1907年に留学生として渡米し、その町で小さなホテルを経営していた父と母の下に育ちました。当時のシアトルは、全米で2番目に大きな日系「コミュニティ」を形成していたと言います。「父の教育方針で、他の二世と同様、地元（の日本語学校）へ通い、その上、私設の塾にも行って、家庭教師もつきました。計12年にわたって日本語を勉強したのです。でも日本語は漢字が難しいから大嫌い」とヒロさんは笑います。

42年、ワシントン大学1年生の時に、陸軍に徴兵。日系人が敵性外国人とみなされ徴兵が中断される直前のことでした。そしてほぼ時を同じくして、両親と弟、友人の多くはチュリップ集合センターを経て、アイダホ州ミニドカの収容所へ強制収容されました。「収容所へ行くか、兵役に就くかの2択を迫られたのです。兵役を拒否して市民権を剥奪されてはと、徴兵に応じました」。

ヒロさんはアーカンソーのキャ

ンブ・ロビンソンで基礎訓練を受けた後、高い日本語能力を買われてMISに所属することになりました。「442連隊に行きたかったし、6カ月も学校に行って日本語を勉強するなんて……と頭を抱えましたよ（笑）。でもそれまで日系人だからと二級の兵士として扱われていたのが、国のために戦う一人前の兵士として扱ってもらえるようになり、複雑な気持ちでした」。

ミネソタのキャンプ・サベージでMISの学校に通った後、43年8月、日本兵の尋問や書類を翻訳するため、英印第25師団の一員として中国を経由してビルマ（現ミャンマー）へ。ビルマでは、日本軍の決死隊による夜襲を受けるなど、死闘が繰り返られていました。44年5月、日本軍の陣地に突入したヒロさんは、横たわる日本兵のしかばねの陰から日章旗を見つけます。ビルマからインドに移動し、そこで太平洋戦争は終結。シアトルへ帰ったヒロさんはビルマで拾った旗を実家の仏壇に供えました。

終戦から7年後、ある日本人に旗の話をしたところ、日本の新聞社やラジオ局が、持ち主を探してくれることに……。その結果、旗は当時捕虜になっていた徳島連隊

の兵士のものであり、なんと生きていることが分かったのです。88年、ヒロさんは元日本軍兵士と東京で会い、旗を返却。今、その旗は、徳島県の戦没者慰霊塔、パゴダ記念塔に奉納されています。

一人一人の証言の積み重ねが もたらした戦後の補償

ヒロさんの戦後はそれだけでは終わりません。70年代からは戦時中の日系人の強制収容に対する謝罪と補償を求める運動に参加するようになります。43年の出兵前、ミニドカ収容所に家族を訪ねたヒロさんは、社会から排斥され、有刺鉄線の中で監視されて暮らす二世の生活に激しい憤りを覚えたことを思い出し、黙っていられたかったです。

「米国のために戦った退役軍人として、家族のため、友達のため、米国政府に不満を伝えたかったのです。私は周りの二世にも、『親のため、友達のためになるから不満を言いなさい』と言いました。でも、多くの二世は『恥ずかしい』『私はキャンプに行っていない』と遠慮して何も言いません。私だってキャンプには行っていません。でも、親があんな目に遭ったら、遠慮するべきではないんです」。

81年に全米各地で開催された「戦時市民転住収容に関する委員会」の公聴会は、9月にシアトルでも開かれ、ヒロさんは証言者として出席。与えられた時間はたった3分間。祖国・日本と、米軍に徴兵された子どもとの間で板挟みになった二世たちの苦悩や収容所での苦しかった生活を訴えました。

こうした一人一人の証言の積み重ねが実を結び、88年、強制収容に対する謝罪と補償を定めた「市民の自由法」が成立。ヒロさんは「気が楽になって生き返ったような気分でした。カタルシスという言葉をこの時に実感したんです」と微笑みながら振り返ります。

公聴会での証言の後、さまざまな思いがとめどなくあふれ、ヒロさんは毎日少しずつそれを書き綴り、また資料を集めるようになりました。そして、93年にはそれらを軸に日系人の歴史を記した著書『Trials and Triumphs of the Nikkei』を発表。その後も、今になるまで講演などで積極的に自らの経験を語り続けています。

Hiro Nishimura

1919年、ワシントン州シアトル生まれの日系二世。両親は広島県出身。42年、ワシントン大学在学中に米軍に徴兵され、MISとして従軍。終戦後、ワシントン大学に復学し、その後、同大学の健康科学研究所などに勤務。70年代から日系人の強制収容に対する補償運動に参加し、81年には「戦時市民転住収容に関する委員会（CWRIC）」公聴会の証言に立つ。93年『Trials and Triumphs of the Nikkei』を上梓。



1945年の終戦後、シアトルのボランティアパークに日系二世の退役軍人が集まり記念撮影。ヒロさんは前列右から6番目



SAN DIEGO

戦争・強制収容の苦難と

その中でも続いた暖かな交流の記憶

ミチオ・ヒマカさん

真珠湾攻撃の翌日から
誰も話してくれなくなった

サンディエゴの日系人の歴史を収集し、伝承するThe Japanese American Historical Society of San Diego (JAHS)が設立されたのは1992年のこと。ミチオ・ヒマカさんは立ち上げ当時の役員の一人でもあり、自身の体験を積極的に語ってきた一人です。

「それまでは戦争中のことを日系人同士で話すことはあっても、公に語ることはありませんでした。決まりの悪い、言いにくいことだと思っていたんです。でも、戦後生まれの人が多くなり、何も知らない人が増えてきて、伝える時が来たと思うようになりました。そしてJAHSDを立ち上げた頃から、学校などで話すようになりました。聞き手の多くは、戦後生まれの米国人の親と子どもたちで、話をすると『酷いことをした、申し訳ない』と言ってくれます」。

太平洋戦争が始まった時、ミチオさんは9歳。今でも忘れないのが、真珠湾攻撃があった1941年の12月7日が日曜日だったこと。私は4年生で、金曜日に『また来週ね。良い週末を』と同級生といつも通りに別れたんですよ。で、

月曜日に学校に行ったら誰も話してくれなくなっていたんです」。

仕方がないので当時学校にいた4人の日系人で固まって行動するようになった。一方で、戦争が始まった後も、もともと親しくしていた人たちは離れていくことはなかったと言います。当時、両親はサンディエゴのダウンタウンで豆腐屋をしていた。そこで一緒に働いていたアメリカ人の男性は私たちが家族の良き友人でもあって、私たちが収容所に送られた後も新聞や雑誌を送ってくれ、時々会いに来てくれました。彼は収容所の中には入れないので『何日に行くよ』と連絡を取り合って、フェンス越しに近況報告をしました」。

当時、サンディエゴの日本人、日系人の多くは郊外で農業に携わっていましたが、ミチオさん一家のようにダウンタウンで商売をする家族もありました。カフェやレストラン、グローサリーストア、靴屋、床屋、ビリヤード場など、業種は多岐にわたり、ダウンタウンの二画は日系ビジネス街になっていました。42年4月8日に日系人が収容所に送られて、全ての店が一斉に閉まったので、『どうして皆いなくなったの?』と驚いた人がいたと聞いたことがあります」。

収容所生活で失ったもの
失わなかったもの

立ち退きの日、ミチオさん一家を含む、サンディエゴの日系人の多くは、まずサンタアナ集合センターに送られました。馬小屋での約4カ月の生活を経て、アリゾナ州ポストン収容所に収容。ミチオさんの父親は日系コミュニティのリーダー的存在であったため、太平洋戦争が始まった12月7日の夜に拘束されており、その後3年、家族とは別々でした。

「私たちの世代はまだ子どもだったので、収容所ではスポーツをしたり、遊んだり。一番大変だったのは母親だと思います。というのも、私の母を含めて、父親が別の収容所に送られていた家庭も多くありましたから。それまで家族の長は父だったのに、急に母親が全てを背負わなくてはいけなくなりました。収容所生活の前後は、私たち日系人の家族における父親の存在のあり方が変わってしまったと思います」。

終戦直前になってようやく父と合流した一家は、戦争が終わると収容所を出て、職を求めてオハイオ州クリーブランドへ。そこで3年暮らして、サンディエゴに戻

て来ました。しかし、戦前、活況だった日系コミュニティは当然そこにはありませんでした。

88年、市民の自由法が成立し、立法時に生存していた日系人、永住者の被収容者に90年から各自2万ドルの補償金が支払われましたが、『商売をたたんで、収容所では月20ドル程度しか稼げなかったことを考えると、もっともらっても良かった』と私は思っています。でも、それ以上に悔やまれるのは、本当なら補償金をもらうべきはずの世代の多くが他界していたことです」とミチオさん。

苦難の歴史を語ってくれたミチオさん。しかし、『困ったことがあったらいつでも手紙を送って』と強制収容所に送られる子どもたちを見送りながら一人一人にハガキを渡して支援を続けた図書館司書の話や、収容所に志願してやってきた米国人教師の話、収容所の外の米国人チームとスポーツ親善試合の話など、厳しい状況の中にも暖かな交流があったことにも何度も言及されました。

Michio Himaka

1932年、サンディエゴ生まれの日系二世。10歳の時、アリゾナ州のポストン収容所に。終戦後はサンディエゴ州立大学でジャーナリズムを専攻し、卒業後、『San Diego Union Tribune』に就職。The Japanese American Historical Society of San Diegoでは、立ち上げ時から2015年6月まで役員。会長も務めた。また、02年より現在までSouthwestern Collegeの事務補佐の仕事をしている。



ポストン収容所で撮影した家族写真。一番左がミチオさん

Photo Courtesy of Japanese American Historical Society of San Diego



日系人
リーダーに
聞く！

全ての人の平等な権利のために…

日系人に対する戦後補償の背景

プリシラ・オウチダさん

日系人不当解雇に対する 加州の補償法案の成立

日系米国人市民連盟(JACL)で女性として初の事務局長を務めるプリシラ・オウチダさんが、自身が日系人だと知ったのは4歳のハロウィーンのこと。トリック・オア・トリートに訪ねた白人女性の家で『ジャップにやるキャンデーはない』と言われたのです。自分が日系人であり、また日系人を嫌う白人がいて、世の中には不平等があると知った日でした。その日から『平等』ということが私にとって非常に重要なテーマになりました」とオウチダさん。

系人の収容に対する補償を求める運動を知ったオウチダさんは、自分の持つ資料が日系人の不当解雇を立証し、金銭的補償を求めるに足る証拠を全て備えたものであると気付いたのです。JACLの助力を得て補償法案を起草し、当時オウチダさんが立法スタッフとして働いていたカリフォルニア州のパトリック・ジェンストン下院議員が州議会に法案を提出。82年に法案は成立を迎えたのですが、実はこれはJACLが関わった補償法案が成立した初めての事例でした。法案の署名式には40社以上のプレスが駆けつけ、全米中に法案の成立と日系人が受けた不平等が報道されました。

「署名式には日系人の元州議員を招いたのですが、彼らの多くが古い茶封筒を手にしていました。それは42年に州が送った解雇通知でした。その時、彼らにとってスパイだと疑われ解雇されたことがどれだけ深い傷だったのか痛感しました。彼らは収容所に送られた時も、戦後も、40年にわたってその紙をずっと持っていたのです。でもその署名式の日、『州が間違いだと認めてくれた。もうこれは恥ではない』と誇らしげな笑顔を見せてくれたのです」。

日系人が経験した不平等が 二度と起らないように

70年代から80年代にかけて、いよいよ全米で本格化した強制収容に対する補償運動。JACLをはじめとするさまざまな日系団体、そしてアフリカ系、ユダヤ系団体の働きかけにより、連邦議会に「戦時市民転住収容に関する委員会」が設立され、81年に全米各地で公聴会を実施。それまで収容に関して沈黙を守っていた750人が証言台に立ったのです。

「そのうちで82年にカリフォルニア州の補償法が成立し、補償運動は加州下院議員の支援を得るなど政治的な関心を集めるようになりました。法案成立のためには、草の根運動だけでなく、過半数の連邦下院議員の賛同という政治的な運動が必要でしたから、大きな影響を与えたのではないかと思います」とオウチダさん。

「ダニエル・インウエやスパーク・マツナガ、ノーマン・ミネタ、ロバート・マツイといった日系議員によるホワイトハウスへの運動もあり、88年に日系人の強制収容に対する謝罪と、生存者に対し1人あたり2万ドルの金銭的補償を定めた『市民の自由法(日系アメ

リカ人補償法)』が成立。『2万ドルは実際の損失には到底及ばないものですが、象徴的な意味がありました。謝罪だけでは政府はすぐに忘れてしまいますが、身銭を切ったものは忘れにくいものですから』。金銭はただ補償の意味合いがあつたばかりでなく、全てのアメリカ人の憲法で守られた権利が二度と侵害されないためのくさびでもあつたのです。

このほかにも日本人の帰化を禁じた移民国籍法の改正(52年)、アジアからの移民数を制限した移民法の改正(65年)など、日系人は一歩一歩、今は当たり前のように感じられる『平等』の権利を勝ち取ってきました。それでも残念ながら、この世界にはいつも不平等の可能性がります。しかし、どんなエスニックでも、どんな年齢でも、どんな性別でも、誰しもが平等な権利を持ち、誰しもが平等の機会を持つ必要があります。日系人が経験した不平等が二度と起らないように…。オウチダさんの闘いは今も続いています。

Priscilla Ouchida

サクラメント生まれの三世。2012年より、女性として初めての日系米国人市民連盟(Japanese American Citizens League, JACL)事務局長を務めている。JACLは1929年にアジア系米国人の人権保護のために設立された団体。戦時中は強制収容へ協力的な姿勢をとり、日系人部隊の編成を推進したことから多くの批判も受けたが、戦後は強制収容に対する補償法案などさまざまな人権運動を牽引している。



カリフォルニア州の日系人職員不当解雇に対する補償法案の署名式(1982年)、左から3人目は当時も州知事であったジェリー・ブラウン

米日カウンシル会長として 日米間の関係作りに尽力

アイリーン・ヒラノ・イノウエさん

**日系人の歴史を受け継ぐ
全米日系人博物館の役割**

米日カウンシルの会長として日米関係強化に尽力する、アイリーン・ヒラノ・イノウエさん。2009年までは20年以上にわたって、全米日系人博物館の館長として、強制収容をはじめ、日系アメリカ人の歴史や文化の収集、保存、教育に努めてきました。

そのヒラノさんが強制収容のことを詳しく知ったのは、大学に入ってからだったそう。「子どもの頃の学校の歴史の教科書は、日系アメリカ人の経験についてはひと言も触れられていませんでした。また叔父や叔母も戦時中の話題が出て、話すのは共通の友人のことなどの他愛ない話題ばかりで、どこにいたのかなどといった話はほとんどありませんでした」。

カリフォルニア州ロングビーチ生まれ、ガーデナ育ちのヒラノさんの父は、太平洋戦争前から米国陸軍に属し、本来は開戦の頃に除隊予定でした。しかし開戦により除隊は延期。M-1Sの一員となりました。一方、ヒラノさんの親族の多くはアーカンソーの収容所を経て、戦後はシカゴで働いた後、ロサンゼルスに戻ってきました。シカゴ

は当時、日系人が職を得られた数少ない場所のひとつでした。

父も退役後、ロサンゼルスに戻り、日本から移住してきたヒラノさんの母と出会い、結婚。ヒラノさんは、多くの日系人が暮らすガーデナで両親と二世である父方の祖父に育てられ、また3歳の頃には母方の祖母の日本の家で数カ月過ごすなど、非常に日本と近い環境で子ども時代を送りました。「ですから、私は日系人であることを誇りに思っています。しかし博物館で働き始め、実は多くの三世は日本のことをよく知らず、自分たちの先祖がどこから、なぜアメリカにきたのかも知らないというのです。博物館の設立目的の一つでもあります。博物館が、だからこそ、博物館が日系人の歴史を受け継ぎ、そしてそれを多くの来館者に伝えていくことが大切だと思っています」。

**人と人との出会いから
より強固な日米関係を**

ヒラノさんは博物館で三世の訪日ツアーを企画。そして08年に設立した米日カウンシルでは、00年から「在米日系人リーダー訪日プログラム(JALD)」として、米国で活躍する日系人を日本と

つなぐプロジェクトを実施しています。「それまで日本との結び付きがなかった日系人の参加者も、日本を訪れると同時に、ここは私たちの祖先の国だと思ってしまう。参加者の一人は『家族の歴史はハワイに移住した祖父母から始まった気がしていたけれど、彼らには日本に家族がいて、その歴史は僕の歴史で、僕の歴史は日本にもつながっているんだね』と」。

ヒラノさんは、彼らが訪日という形で日本を知ることが、日米関係に非常に重要だと考えています。「そうでなければ、私たちは日本に興味やつながりを持つ世代を完全に失ってしまうかもしれません。もし日本にルーツを持つ日系人でさえ日米関係に興味を持たないなら、どうして他のエスニックが興味を持つでしょうか」。

今年、15年目を迎えたJALD。これまでは日本との関わりが少ない日系人が中心でしたが、今年の参加者には日本在住経験者や日本出身者も。参加者の多様性は、日系アメリカ人の多様性の表れです。現在の日系アメリカ人コミュニティは、戦後に渡米した人や、五世、六世、複数のエスニックを持つ人、近年日本から移住してきた人など、さまざまな人

がいます。「日系アメリカ人」とは誰なのかを定義し直すことも、将来のために、今、非常に意味があることですね。JALDは、そうしたさまざまな来歴を持つ参加者が、日本を知り、アメリカの日系人のコミュニティを知り、貴重な機会にもなっています」。

また、米日カウンシルでは、東日本大震災をうけて日米の若者を互いの国に招く「TOMODACHIイニシアチブ」で若い世代を結びつけるプロジェクトも実施。その理由をヒラノさんはこう語ります。「日米の2国間のつながりは、非常に重要なものですが、2国間にポジティブなつながりを生み出すためには、人が出会い、互いを知り、互いの国を学ぶことが大切です。人々が互いを知っている、万が一問題が起きた時にも、一緒に解決策を見つけていくのも容易になります。米日カウンシルの役割は、そのように人々が互いを知り、互いを学ぶ基盤を作っていくことだと考えています」。

Irene Hirano Inouye

米日カウンシル(U.S.-Japan Council)会長。1948年に福岡出身の二世の父と、日本人の母の間に生まれた日系三世。1988年から2009年にわたって、全米日系人博物館の初代館長を務める。2008年、故ダニエル・イノウエ上院議員と結婚。また同年に米日カウンシルを設立。東日本大震災後、日米両政府と「TOMODACHIイニシアチブ」を立ち上げた。



2015年度在米日系人リーダー訪日(JALD)プログラムでは10人が訪日。写真は南カリフォルニア日系企業協会(JBA)が主催したレセプションにて

